

## 感性、物づくり、物語 —共感の世界の広がりと繋がりを考える—（全 12 回）

### 第8回 経験論を見直す

長島知正（早稲田大学理工研招聘研究員）

#### 1) はじめに——経験論の背景

今日の我が国は様々な問題を抱えながらも、経済的に豊かな国の中に属していると考える人はかなりいるように思われます。もちろん、「国の豊かさ」は豊かさをどう測るかによって、当然大きく変わることは明らかですが、そうしたことを気にせず、豊かかどうかということが判断されているようです。これも、感性と云えるのでしょうか。

しかし、歴史上の経緯はともかく、今日の社会において「感性」や「共感」をどう捉えればよいかは、明確な考え方が未だ定まったとは言えません。それに向けた周辺の整備をすることが必要で、本連載の課題と考えています。そのため、ヒュームの「共感」について紹介する前に、それが産み出された「経験論」と呼ばれる思想の系譜をまとめたいと思います。とはいえ、経験論一般についてまとめるのは、人類の思想全体を考えることになるので、ここでは、西欧の近代化の過程で現れ、一定の影響を与えた「イギリス経験論」を中心に置いて経験論を見直してみたいと思います。

ここで、経験論を見直すというのは、経験論は、理性を中心とする合理主義の勢いに全く抗うことなく、その後の歴史から、少なくともその表舞台から消えてしまったため、今日、おそらく大半の日本人にとり、その影響はほとんどなくなっているように思えます。そのため、経験論への誤解が混入していないか、あるいは合理主義ないし理性主義の限界などを検討したいということが第一にあります。

イギリス経験論と呼ばれるのは、イギリスでおきた 17 世紀科学革命から 18 世紀の産業革命にいたる時代にロック、バークレイ、ヒュームおよびスミス達

によって唱えられた思想を指しています。当時イギリスではニュートンの力学やボイルによる化学の進歩などの自然科学の発展と共に、その後の産業革命によって西欧の一大隆盛期を産み出した時期に当たります。このイギリス経験論は、デカルトなどの合理主義がフランスなどヨーロッパ大陸で発達したことから大陸合理主義と呼ばれますが、それと対比される形で呼ばれています。この時代は、自然科学が進歩すると同時に、それを受けて社会が中世から完全に近代化するという変革が起き、人々の意識も大きく変わった時期と云えます。今日の私達は、明治維新と呼ばれた時代の変革を経て、その大半を近代西欧から移入することによって今日に至った歴史を習いましたが、そうした人々の意識の変化はどのようなもので、またどのようにして起きたのか等、異国で生を受けた私達には、中々本当の事は分かり難いことが多くあります。

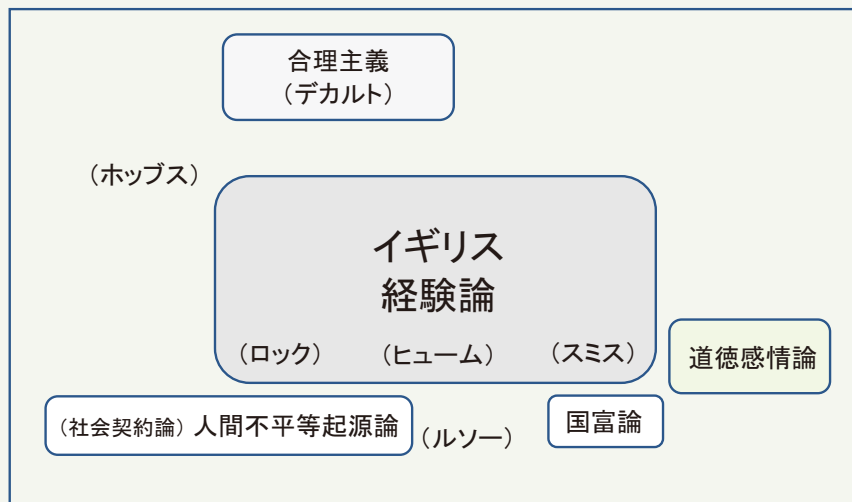


図1. イギリス経験論の連感図

図1に示すように、イギリス経験論には少なくとも、ホブズに始まり、ロックの他、ヒュームを介してルソーに繋がる民主的政治体制の実現のための「社会契約論」の流れの他、ヒューム、スミスによる経済理論の流れが認められます。前者では、ルソーの「社会契約論」が、また後者では、スミスの「国富論」が著され、西洋の政治・経済の近代化に大きな影響を与えたことは良く知られている通りです。これらの経験論に関わった思想家達の活躍した時代をスコットランド啓蒙と呼ぶこともあります。

経験論を見直すということにはもう一つ、感性や共感について、ものと人間の関係、特にものづくりの立場から捉える契機としたいという考えもあります。こうした考え方は、伝統的な思想の枠内では、問題自体重要さは認められていないと思います。しかし、今日解決困難な社会問題のいくつかは従来の西歐的近代に起因すると見えることもあり、これからの社会には、伝統を離れ新しい視点から見る価値はあると考えます。その意味から、著者は理工系の人達が、狭い専門技術的な問題にのみ関わりを持つという従来の思考の枠を超え、人間についての哲学や歴史など人文系分野にも関心をもつようになる重要性を強調したいのです。これからの時代には、人間と工学・技術の新しい関係を構築する、新しい価値観を持つ技術者の存在が不可欠と思えるからです。

## 2) イギリス経験論のはじまり

イギリス経験論は、ロックに始まるといわれています。

経験論の元は古く、「感覚の中に存在しなかったものは、意識の中に存在しない」と云った、ギリシャ時代のアリストテレスに遡ることが出来ます。これは、人間は生まれながらのアイデア＝観念を持ってくるとしたプラトンを批判したアリストテレスの最も基本にある視点ですが、ロックは同じことを「何かを感じる前の意識は、何も書かれていない板のようなものだ」と言い換えました。そして、経験主義のロックは、観念論は、観念の存在を前提としているが、「観念はどこからくるのか」と問います。

ところで、フランスで生まれ、17世紀のヨーロッパ各地を移り住んだデカルトは、世界を精神と物質という全く異なって存在する二つの実体に分けるという考え方（二元論）に立ち、「一切の懐疑を含まない存在としての〈私〉の存在（コギト）と明晰な物質世界の記述の方法」によって、中世の終わり告げ、近代を宣言しました。デカルトは中世に蓄積された、様々な神学的な匂いのする知的遺産を疑い、「方法序説」で説明された数学的方法による物質世界の合理的把握によって、自然科学に対する哲学の基礎付けに成功した点で、西歐の歴史上も最大級の存在と見做されています。そのため、デカルトの名前やコギトと云う言葉は我が国でも大変有名です。

しかし、デカルトが実際にやった内容、特に彼の世界認識の仕組みがどのようなものであったか、本当に理解されているといえるでしょうか。デカルトの認識図式は、図2に示したような、精神→観念→外界 というカントなどにも共通して見られる近代的認識論の核心的構造が関わり、情報工学など理工系の人にも結構影響があると思うのですが、そういう話を著者は聞いたことがありません。この辺りにも、「理工系のための哲学」が必要と感じるものがあります。いずれ、別な機会に取り上げてみたい主題です。

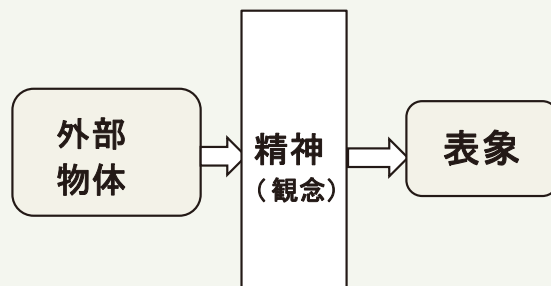


図2. デカルト二元論における対象の認識図式：

知覚とは精神が内なる観念を見ることである。観念は外部の物事を代理的に表象する。外的対象は観念によって表象されることによって、間接的に精神の対象となる。

ロックは、デカルトが言う合理主義の「実体」や「神」という人間に直接経験されることのない観念を疑いました。それらの観念は人間が経験したことのないものです。ロックに依れば、生まれた世界について知覚しないうちは何も知らないのだから、経験された事実とならない観念があるとすれば、それは間違っているというのです。

ロックはまた、感覚の性質として、一次的性質と呼ばれる、延長、つまり広がり、重さ、形、動きなどの性質と色、匂い、味など人の精神によって感じられる性質に分けられると考えました。一次的性質については、感覚がものの本当の性質を再現していると考えられる。しかし、二次的性質は物体そのものに備わった性質を再現していないもので、感覚する人の精神に依存して生じる主観的性質です。

この第二性質は正に感性が関わる領域と云えるでしょう。これは第一性質が物の性質を反映し、科学的な手段、例えば、デカルトが唱えた数学的手段によって客観的に記述できることに対して、第二性質の方は人間の心の中に生じる

もので、把握するためには、個別的な新しい方法が必要で格段に難しくなる事は容易に想像されるでしょう。

この区別には、前回指摘したように一次的性質として延長、つまり広がったものという実体の観念が含まれ、経験論と観念論の混入が見られます。しかし、経験論の立場からは、こうした感覚についての一次的、二次的性質の区別は混乱と云われるけれど、ロックと交流のあったニュートンやボイルなど当時急速に発展させた自然科学者以外にも同時代の優れた多くの科学者はその区別を正しいものと受け止めていたと云われています。

なお、政治学者であったロックは、自然法の考えや自由な個人同士の信託によって成立する（三権独立など）分権論の民主的な政治機構の基礎を論じ、近代政治思想の先駆けとしても知られます。ここで、自然法とは、人間の生存権や同じ倫理的原則を誰もが所有しているという考えです。つまり、彼は、生まれながらにすべての人が持つ権利（人権）として、ここでも生得的観念を認めている訳です。しかし、これは科学的知識と政治理論を同一の土俵の上で考えていた証拠と云えそうです。

ロックの経験論には、観念論の考え方が混ざって中途半端な感じがしますが、ヒュームはイギリス経験論の完成者と云われるように、経験論の考えを相当に徹底しています。その骨子を以下で取りまとめます。

### 3) ヒュームの経験論の概要

ヒュームの経験論の基本的特徴を以下の三点にまとめてみましょう。いずれも、当時の合理主義の旗頭であったデカルトの合理主義ないし理性主義を疑う視点から考えられたものと云えるものです。

#### 1) 因果律とは人間の習慣、つまり繰り返し起きることがもたらす。

これは、物体の運動などに関する科学的原理と、正面から衝突する主張と受け止められ、標準的にはヒュームの経験論に対して否定的な見方を典型的に表すと解釈されています。しかし、この主張は、



「人間は同じような類似した自然現象が繰り返して起きる時、それから因果律が成り立つと思いがちだが、人間は因果律あるいは因果法則自体を経験することなどできない。」と解釈される。

## 2) 人間とは、「バラバラに絶え間なく変化する知覚の束」の様なもの。

これは、人間の知性にたいする経験論の立場からの結論のため、ヒュームによる経験論の破壊的な結論とも云われます。1)のように外部の物体の存在を否定しているように見える特異な思想は、バークレイにもみられる経験論の一つの帰結になっていますが、このような特異な思想は、特に近代に向かおうとする西欧にとって、受け入れられるものではなかったと云えるでしょう。

しかし、2)の言明を、「人格の自己同一性」に関する主張であると考えれば、「人格の同一性に基づく「自我」と云うものなどない」となるでしょう。これは、カントやデカルトが前提している、不変な「私」(自我)というものは存在しないと云っていることになるため、むしろ現代的な人格論に近親性のものになります。

もしこの解釈が正しいなら、2)の主張は仏教の諸行無常と共通する人間観ともいえることになります。一般に、近代西欧と東洋の思想には接点がないと思われていますが、ここで具体的にクロスしている事を確認しておきたいと思います。実は、近代西洋のカントの哲学に関しても、古代インドの思想に既に同じものが見られるなど、西洋と東洋の接点は少ないとはいえ、全くない訳ではなさそうです。今後はそういった視点からの展開も考えられるかも知れません。

## 3) 人間の行為の正しさは、理性で決まる事ではない。

人間の行為の正しさ、つまり道徳的判断は理性ではできず、それは感情が判断するもの。何故なら、極端な例として、「人が人を殺してはいけない」理由は、理性から結論されることではない。一番の理由は、可哀そうだから、認められないのです。つまり、理性でなく、感情が判断の基準になっているのです。ここに感情、つまり広い意味での感性が問題になる大きな理由があります。

一般に判断は論理の問題になりますが、実際の社会問題には、例えば、「原発は経済的だから、もっと開発をしなければならない」といった言明にみられるように、事実と行為の言明が混じる判断に重要な問題があります。ここでも、理性による判断は間違える可能性があります。

我が国では現在、理系・文系の区別は当然と思われているため、ここで取り上げているような問題を実際経験する人は非常に稀ではないかと思いますが、この辺りに、今日の社会に関わる重要な問題で、正しい判断が求められている問題が沢山あります。経験論を見直すことは、理性の限界を明らかにするばかりか、感性の役割を考える上で役立ちます。